

外ヶ浜町大平山元Ⅱ遺跡及びⅢ遺跡の出土石器

齋藤 岳¹⁾

Stone Tools from the Odai-Yamamoto-Ⅱ andⅢ Site in Sotogahama Town
SAITO Takashi

キーワード：大平山元Ⅱ遺跡、大平山元Ⅲ遺跡、旧石器時代、表・写真紹介資料の図示

はじめに

外ヶ浜町大平山元Ⅱ遺跡の1980年に刊行された発掘調査報告書(青森県立郷土館1980)の中には、写真のみ掲載の資料と表のみ記載の資料があった。

そこで、本稿では表のみの掲載となっていた細石刃1点を図示する。

また、昨年度の研究紀要第48号(齋藤2024)では、接合資料の写真図版17-1について、接合状態を図示した。

本稿では接合状態のカラー写真を掲載し、その主要剥片を図示する。

写真のみの紹介資料は、他に写真図版16-3の接合資料がある。その詳細が分かるように主要部分を図示し、カラー写真で紹介する。

大平山元Ⅱ遺跡に隣接する大平山元Ⅲ遺跡に関しては、発掘調査報告書(青森県立郷土館1981)の中で文章のみ記載されている資料が2点ある。当該石器の可能性のある資料を図示する。

あわせて報告書掲載外の尖頭器と細石刃を各1点、図示して紹介する。

1 大平山元Ⅱ遺跡の報告書で表・写真のみ紹介の石器(図1～3)

図1-1は報告書の表5に細石刃様剥片②として記載されていた細石刃である。石器の器体に注記されていたグリッド番号と石器番号一致したことにより、該当する石器と判明した。

図1-2に報告書写真図版17-1の接合状態をカラー写真で示す。

また図2にその接合資料を構成する18片の剥片のうち、主要剥片12点を図示する。すべて同じC17グリッドから出土しており、一部剥片には礫皮が残る。器体の縁辺から求心的な剥離が繰り返されており、両面調整の石器製作時の調整剥片と考えられる。この場所で剥片剥離が行われたものの、中心部の両面調整の石器本体は他の場所に持ち運ばれたと考えられる。他に同一母岩と考えられる剥片が複数あるが、いずれも同様の調整剥片であり、接合しない。

図3に報告書写真図版16-3の主要剥片を図示する。一部は接合状態で図示した。石刃・縦長剥片1点、剥片17点の計18点のうち、16点を図示する。

石核(おそらくは石刃核)を作り出した時の調整剥片が多い。石核はなく、他の場所に持ち運ばれたと考えられる。

図3-1～5は、1の正面右側の剥離面に2と3が接合し、さらには4・5と接合する。4・5との接合は写真で接合部を拡大して示した通り、確実である。しかし、接合面の幅は2mm程度であり、全体の接合図面は図示できなかった。図3-1～5の写真で、接合部分が密着できていないように、接合状態で静止させることが困難である。

図3-2-7～10は接合状態で図示した。報告書の写真図版16-3の右側写真では図3-1～5と接合しているように見える。石の模様の連続性からも、おおよその位置としては合致している。しかし、両者の間に本来入るべき1点から2点の剥片がないため、接合しない。

図3-2-15は、礫皮を持ち、石刃核の打面を作るために除去された剥片である。その腹面は図3-1及び図3-2-7～10、さらには図3-6の打面と接合するのは確実であるが、それらの打面が小面積のため、図3-2-15の腹面との接合部分を特定できない。そのため、接合図を作成していない。

なお図3-6は、器体上部の石の色模様や夾雑物が、図3-1～5及び図3-2-7～10の器体上部と類似する。

当初は同一個体の剥片として扱ったため、図3の集合写真撮影時には、一緒に撮影していない。しかし、図3-1～5及び図3-2-7～10の打面付近の碎片の剥離状況が類似し、その打面は図3-2-15の腹面と接合する事は確実なため、本接合資料の中に含めた。

なお、複数の同一母岩の剥片が存在するが、礫皮を持つ剥片や石刃核の整形のための調整剥片であり、接合しない。

1) 青森県立郷土館 学芸課副課長・副参事(〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

2 大平山元Ⅲ遺跡の出土石器(図4)

図4-1は発掘調査報告書17頁に記載されているH14S2の尖頭状削器の可能性がある。

その記載は「長さ12.7cm、幅4.2cm、厚さ1.76cmを計る。ヒンジフラクチャーをなす縦長剥片の末端の周縁に2次加工を施すとともに、基部背面に2次加工を施して打面・打瘤を除去し尖頭器状に仕上げている。また自然面を残す左側面に特に入念な調整を加えているが、光沢や刃コボレ等使用痕と考えられるものは主として右側縁に観察される。主要剥離面の調整は、末端と基部において若干施されているだけである。」

石器に記載された注記は「表採」である。報告書記載内容と一部は異なるものの一致する部分の方が多い。報告書の長さ12.7cm、幅4.2cmと記載された法量は、図4-1の、長さ13.2cm、幅4.3cm、に近似する。報告書での厚さは1.76cmとなっている。小数点第2まで測定しておりノギスで計測したと考えられる。当該石器を図面上で厚さを求めると2.7cmになるが、ノギスのように最大幅で測定すると1.6cmと近似した値となる。

また、掲載外資料から長さ10cmを越える大形で、一端が尖った石器として抽出できたのは図4-1のみである。

図4-2は同報告書の17頁に記載されているH14S3の尖頭状削器の可能性がある。

その記載は「長さ7cm、幅3.2cm、厚さ0.8cmを計る。打面の転移された石刃を素材としている。基部背面に調整を施して打面・打瘤部分を除去し、尖頭部を作出している。また背面末端の右側縁に微細な調整が施されているが、主要剥離面では周縁に微細な刃コボレを観察しうる以外、何ら調整は認められない。」である。

図4-2の法量は長さ6.8cm、幅3.1cm、厚さ1cmとH14S3の法量に近似しており、記載内容は一致する。

大平山元Ⅲ遺跡の出土石器に関しては、多くの出土品は注記がなされ、取上時のカードとともに収納されている。注記の無い一部資料には、多くの場合はカードが入っている。図4-2は注記とカードが無いことに、留意していた資料であった。

図4-3・4はH14S2・H14S3の搜索過程で見つかったものであり、あわせて紹介する。

図4-3は細石刃である。

図4-4は尖頭器の上半部の残欠である。正面右側では先端からの剥離の後に、先端部を弧状に細部加工している。有樋尖頭器の樋状剥離の打面を作り出した可能性がある。

おわりに

本稿では、大平山元Ⅱ遺跡の報告書の写真図版17-1の個別剥片の実測図、写真図版16-3の剥片と一部剥片の接合状態の実測図をカラー写真とともに掲載した。

そして、隣接する大平山元Ⅲ遺跡の文章のみの記載資料に相当する可能性のある資料、掲載外資料の一部を図示した。

今後、展示その他で活用できるものとする。

また、有樋尖頭器は近年、研究が進展しており（須藤2014ほか、橋本2017ほか）、有樋尖頭器を多数出土した大平山元Ⅱ遺跡の石器群は、重要である。また、未洗浄の小袋に碎片が一括されて入っていたものがあり、細石刃や小形石刃も含まれていた。大平山元Ⅱ遺跡の報告書では小形石刃を目的剥片とする剥離技法が考えられている。

それらの整理を進め、目的を明確にした研究により、大平山元Ⅱ遺跡の石器群は、今後も多くの情報を引き出せる資料体と考える。

引用参考文献

青森県立郷土館1980『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第8集

青森県立郷土館1981『大平山元Ⅲ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第11集

外ヶ浜町教育委員会2011『大平山元 旧石器時代から縄文時代への移行を考える遺跡群』外ヶ浜町教育委員会

外ヶ浜町教育委員会2019『史跡 大平山元遺跡』

齋藤岳2024「外ヶ浜町大平山元Ⅱ遺跡の出土石器」『青森県立郷土館研究紀要』第48号 15-16頁

須藤隆司2014「削片系両面調整石器—男女倉・東内野型有樋尖頭器の再構築—」『資源環境と人類』第4号 39-56頁

須藤隆司2020「男女倉石器群の削片技術—男女倉遺跡群整理過程報告1—」『資源環境と人類』第10号 45-54頁

須藤隆司2024「男女倉ナイフ形石器の形態製作システム」『資源環境と人類』第14号 15-36頁

橋本勝雄2017「佐倉市太田・大篠塚遺跡出土の旧石器時代遺物の再評価：有樋尖頭器に関する一考察(上)」佐倉市史研究 30号

橋本勝雄2018「佐倉市太田・大篠塚遺跡出土の旧石器時代遺物の再評価：有樋尖頭器に関する一考察(下)」佐倉市史研究 31号 18-31頁

表1 大平山元Ⅱ遺跡・大平山元Ⅲ遺跡 石器観察表

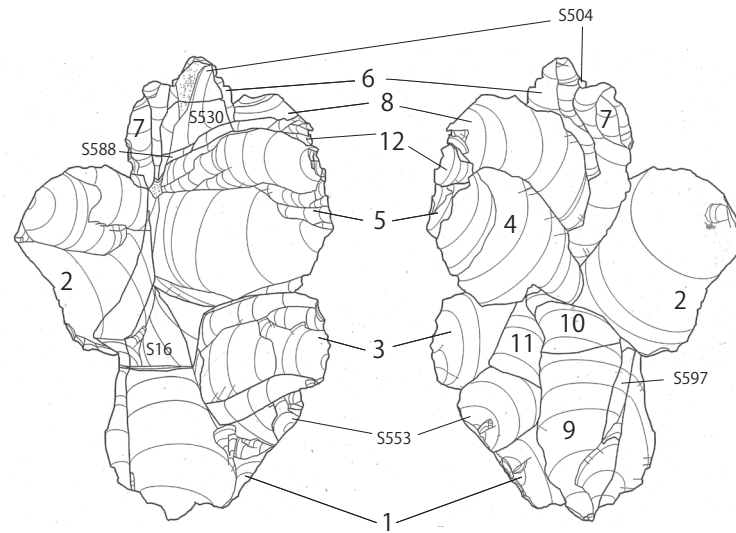
図	番号	器種	長さ (cm)	幅(cm)	厚さ (cm)	重さ(g)	出土地点・層位	備考
1	1	細石刃	1.8	0.6	0.1	0.1未満	D12S617Ⅱ上	報告書8集「表5-細石刃様剥片②」、珪質頁岩、完形、打面残存
1	2	接合資料	19.7	13.5	4.5	122.0	-	報告書8集「写真17-1」、紀要48号図1-5、珪質頁岩、剥片18点、18片接合、本稿図2で主要剥片を図示、カラー写真掲載
2-1	1	剥片	11.2	10.5	2.0	92.5	D17Ⅱ下S571	珪質頁岩
2-1	2	剥片	9.8	9.7	1.7	74.2	D17Ⅱ下S604	珪質頁岩
2-2	3	剥片	6.9	5.4	1.2	27.1	D17Ⅱ下S662	珪質頁岩
2-2	4	剥片	7.4	5.6	1.0	25.4	D17Ⅱ下S525	珪質頁岩
2-2	5	剥片	9.3	6.1	1.3	60.0	D17Ⅱ下S599	正面打面付近つぶれ
2-2	6	剥片	6.6	4.9	0.7	11.4	D17Ⅱ下S659	
2-2	7	剥片	8.7	5.6	1.1	29.0	D17Ⅱ下S640	
2-2	8	剥片	7.2	5.5	1.2	24.8	D17Ⅱ下S767	
2-2	9	剥片	10.4	4.1	1.2	22.7	D17Ⅱ下S537	
2-2	10	剥片				6.0	D17Ⅱ下S222	
2-2	11	剥片	6.1	3.7	0.8	11.1	D17Ⅱ下S705	
2-2	12	剥片	5.9	2.0	0.4	2.8	D17Ⅱ下S673	
3-1	-	接合資料	13.5	11.5	9.5	702.1	-	報告書8集「写真16-3」、珪質頁岩、石刃・縦長剥片1点、剥片17点、18片接合、本稿図37で主要剥片を図示、カラー写真掲載
3-1	1	石刃・縦長剥片	9.8	6.2	1.8	83.1	注記無し	
3-1	2	剥片	(3.8)	3.0	0.6	(4.5)	D17Ⅱ下S601	
3-1	3	剥片	(4.6)	(2.1)	(0.5)	(2.4)	D17ⅡS152	
3-1	4	剥片	5.4	6.6	-	12.5	D17ⅡS7	
3-1	5	剥片				6.4	D17Ⅱ下S556	
3-1	6	剥片	7.3	3.6	1.1	11.4	D17Ⅱ下S762	
3-2	7	剥片	8.6	8.3	15.5	63.9	D17ⅡS37	
3-2	8	剥片					D17ⅡS200	
3-2	9	剥片					注記無し	
3-2	10	剥片					注記無し	
3-2	11	剥片	8.0	6.2	-	14.0	D17ⅡS156	
3-2	12	剥片				15.6	D17Ⅱ下S591	
3-2	13	剥片	5.4	9.2	-	66.0	D17Ⅰ	
3-2	14	剥片					D1〇ⅡS220	
3-2	15	剥片	7.2	9.8	2.4	125.3	D17ⅡS571	
3-2	16	剥片	8.3	8.6	3.4	206.8	D17Ⅱ	
4	1	削器	13.2	4.3	2.7	75.0	Ⅲ表	珪質頁岩、報告書11集17頁の「H14S2」の可能性有
4	2	削器	6.8	3.1	1.0	15.3	注記・カードなし	珪質頁岩、報告書11集17頁の「H14S3」の可能性有
4	3	細石刃	1.8	0.8	2.0	0.1	注記・カードなし	珪質頁岩
4	4	尖頭器	(8.0)	4.9	2.0	(75.8)	Ⅲ表	珪質頁岩

凡例

- ・8集報告書は青森県立郷土館1980『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第8集をさす。
- ・11集報告書は青森県立郷土館1981『大平山元Ⅲ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第11集をさす。



図1 大平山元Ⅱ遺跡 報告書表5-細石刃②・写真17-1



図のないものは石器番号(S番)表示

写真 17-3 全体図の中の個別剥片

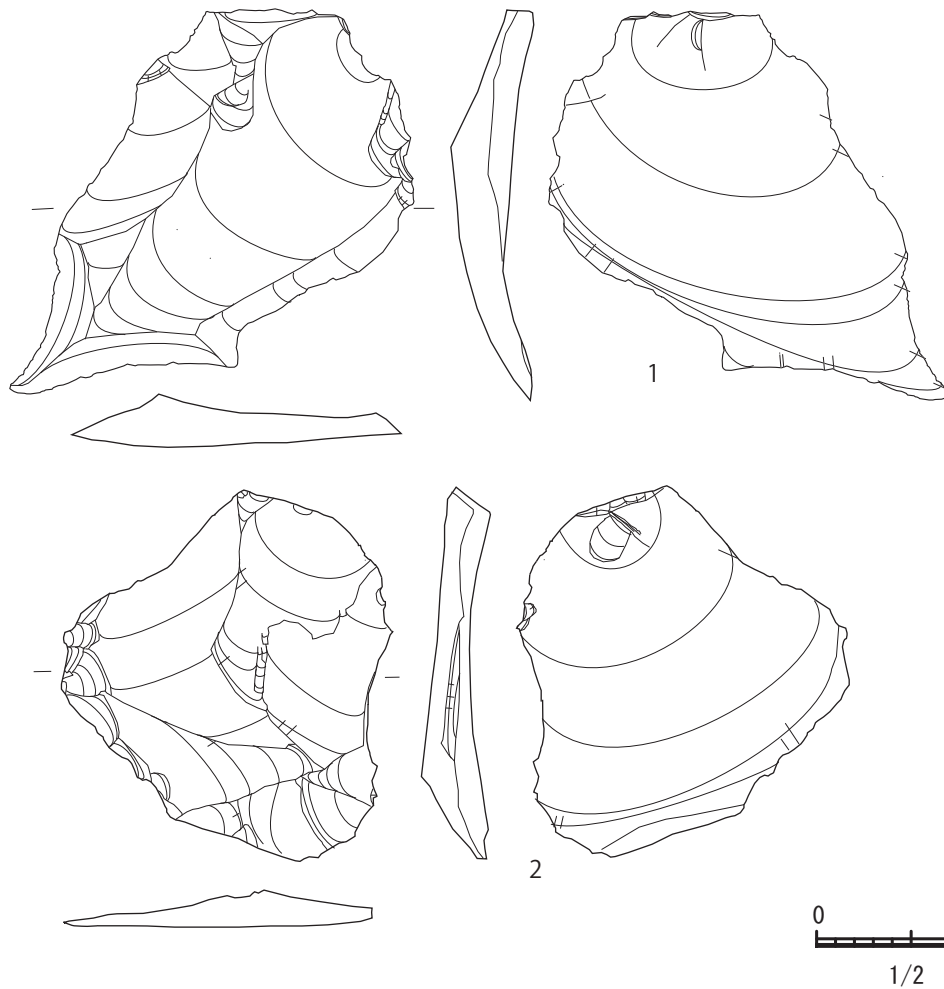


図2-1 大平山元Ⅱ遺跡 報告書写真17-1の主要剥片(1)

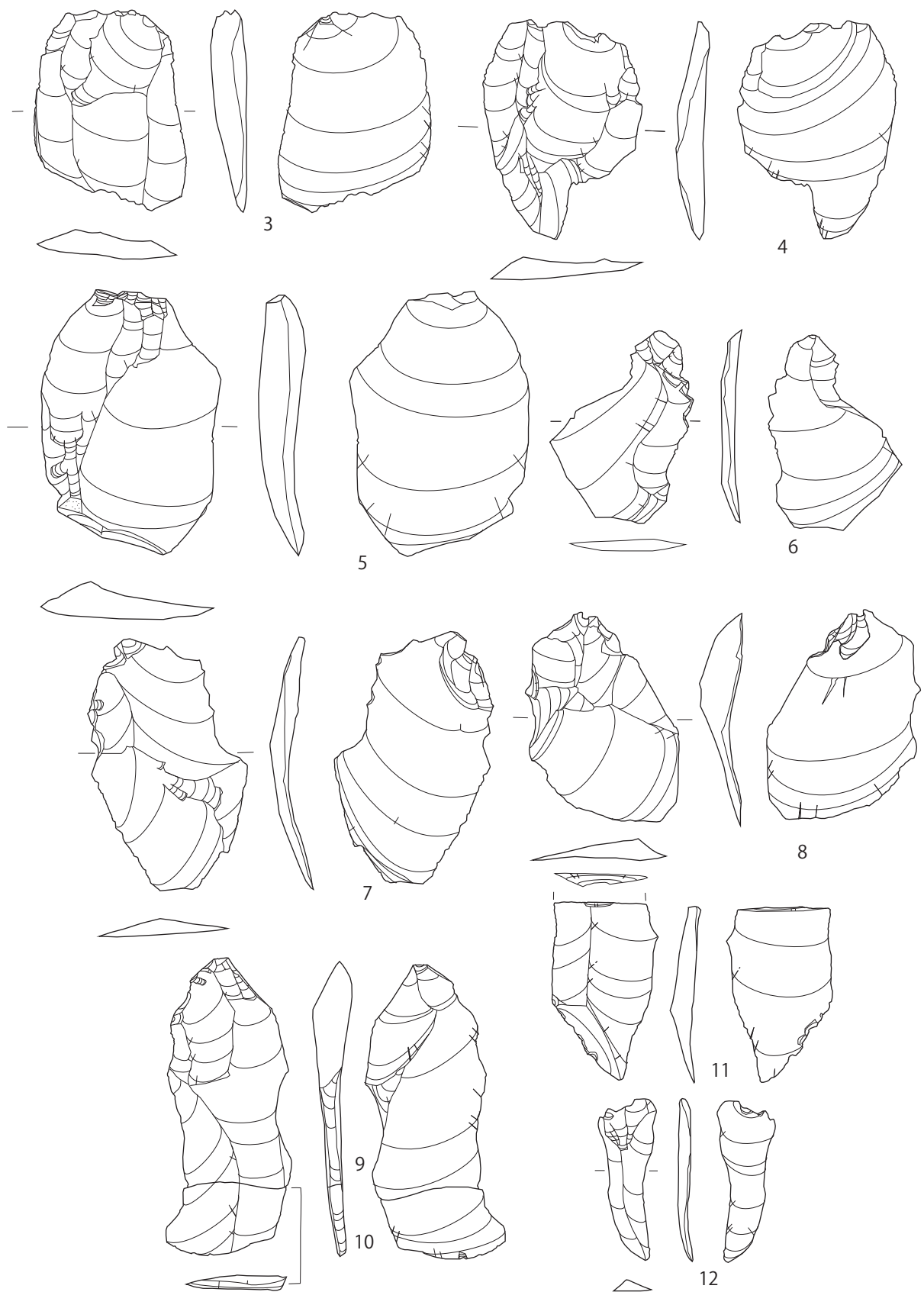


図2-2 大平山元Ⅱ遺跡 報告書写真17-1の主要剥片(2)

0 5cm
1/2

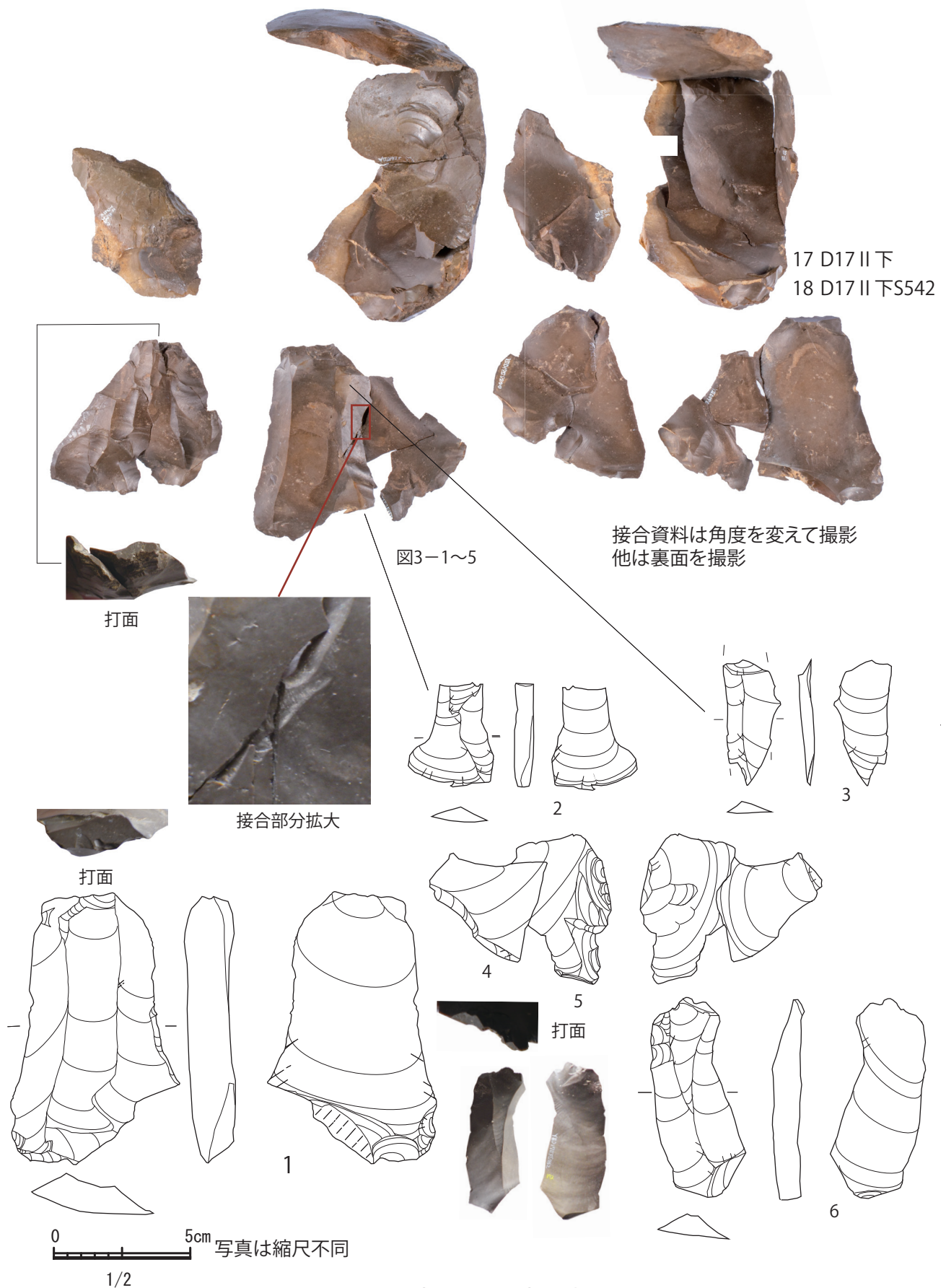


図3-1 大平山元Ⅱ遺跡 報告書写真16-3の主要剥片(1)

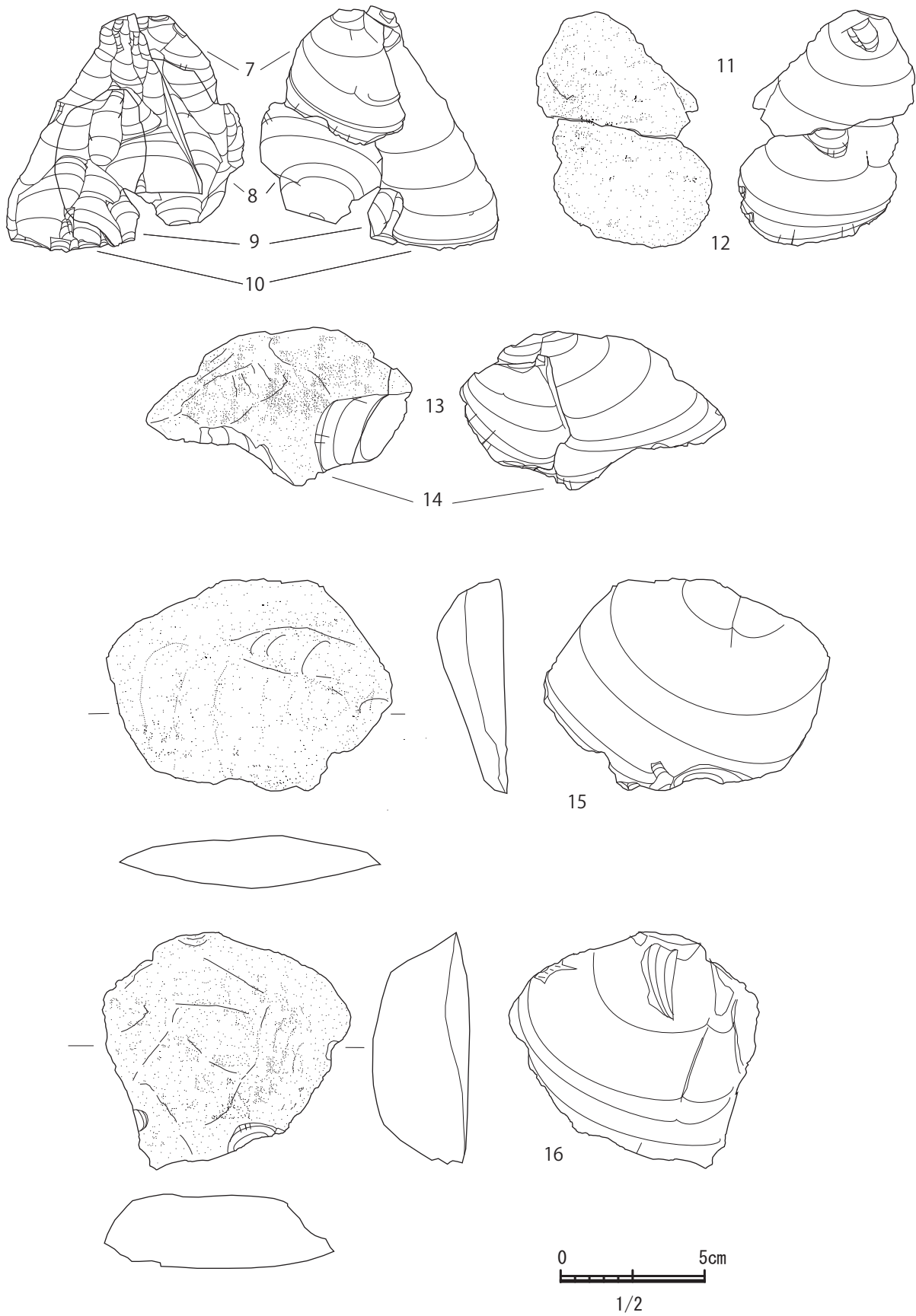


図3-2 大平山元Ⅱ遺跡 報告書写真16-3の主要剥片(2)

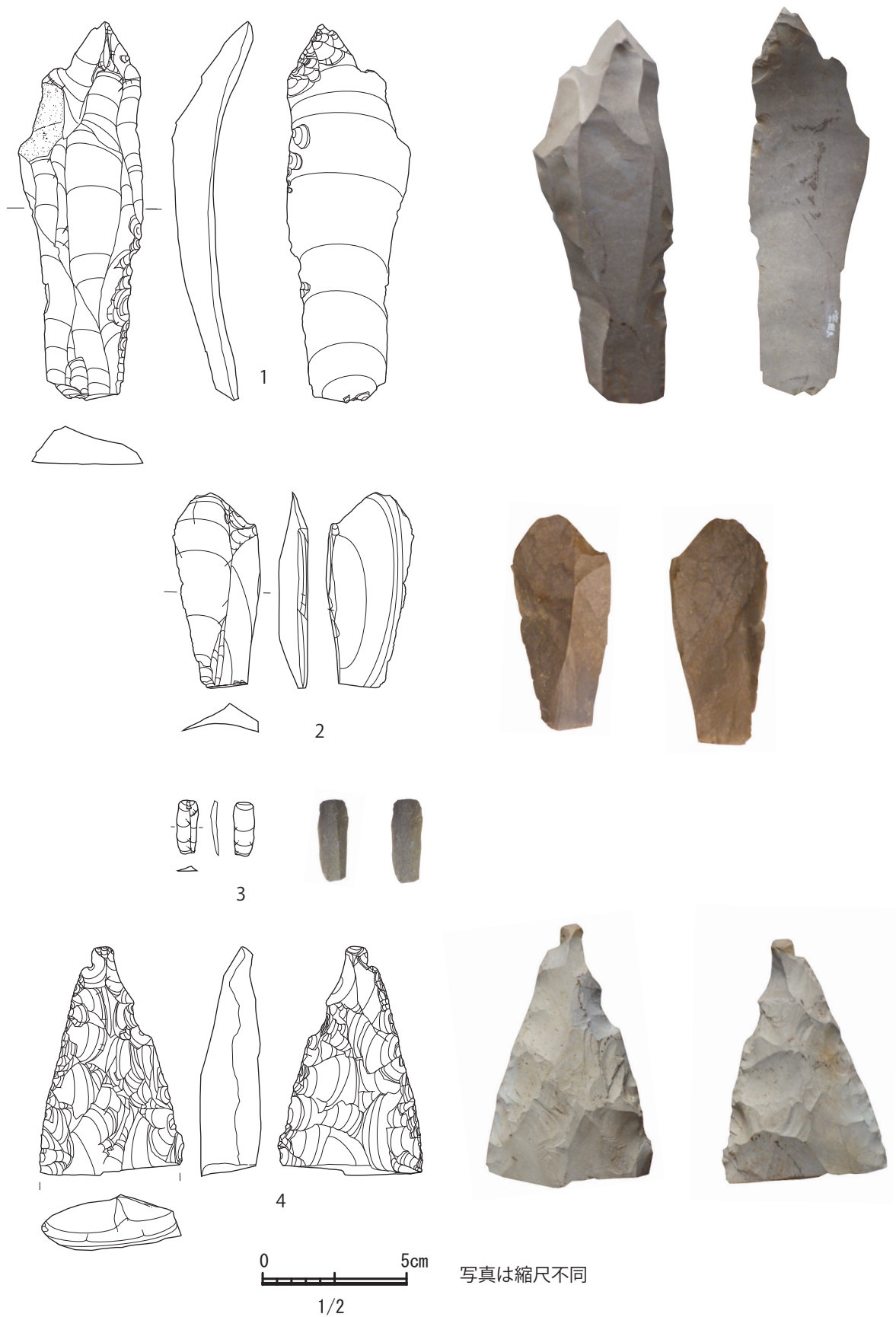


図4 大平山元Ⅲ遺跡 出土石器

青森県立郷土館研究紀要 第49号(令和7年3月) 正誤表

頁	行・図番号	誤	正
31	本文15行目	石器番号一致した	石器番号が一致した
33	表1 凡例1行目	8集報告書は	報告書8集は
33	表1 凡例2行目	11集報告書は	報告書11集は